て、くゞりの敷居などのごひなどして、くゞりの戸を立、少開掛て亭主は内へ入べし、くゞり開て亭主と客と時宜過て、客に衣御取候へと云べし、其時亭主と客との位に依て、客の衣肩衣など取事もあり、とらざる事も、客に依、亭主の位高く、白衣にても御出有べし、大形は其身によりて、肩衣成共善して、亭主も取べし、〇略中

一亭主くゞりの口をしめて内へ入候共、客其儘くゞりを開き内へ入べからず、其子細は亭主は前に氣を付、路地の失念に心を入て吟味する物也、少相待、亭主の内へ入候半とおもふ時分をうかゞいて、路地の口を開きて入べし、此くゞりの口を入に、大事の心持あれ共、委細は書付がたき也、

一くゞりの外にての座配の時宜は、亭主の出ざる先にもすべし、又亭主くゞりの戸をしめてよりも不有苦、時の仕合仕第、

一客次第々々路地に入て、飛石其外植木何も氣を付ほむべし、餘り物知顔は無益也、又功者顔、高聲にほむる事もおこがましし、分別してほむべし、

〔細川茶湯之書下〕一昔はかならず外の廬路口まで亭主迎に出たれ共、近年は廬路の内、中のゑきりくゞり迄來り、外のくちひらきて、供の者までも外の腰かけへはいりて、そこにてかみゆひなをし、衣裳をきる客人もあり、

一亭主むかひに出て、亭主よりなにとぞ申べし、其返事仕、此方は何とも不申、承はり一禮可仕事也、

一相客により先へは御免可被成候と斟酌可申、おなじくは中に有がよし、先には其日の道引也、跡は後見衆也、中は初心の人もよし、先人のまね功者にまかする事多し、

一廬路口まで上たびはき、少かたはらにてぬぎ、新敷せきだ手に持て、廬路口のはじめの石より、